

令和4年度 特別の教育課程の実施状況

文化学園大学杉並中学・高等学校

〔I〕 自己評価

新たに始まった中1DD7のプログラムを含め全ての教科が計画通りに行われ、それぞれに成果を上げていると言える。日本とBC州の両方のカリキュラムを同時に学習することは、生徒にとっては、単により多くの教科・科目を修得するだけのことではなく、日々の学びを通じてそれぞれのバックボーンとしてある日本とカナダの文化を直接的に体験すること、協調性と柔軟性を特徴とする日本的思考とロジカルでクリティカルな西洋型思考の両方を身につけることを意味している。

実際に、こうした本校の教育活動を通じて、集団においてチームワークを重視しつつも、自らの意見はしっかりと持ち、それをロジカルに、しかも魅力的に表現する技術を身につけたグローバルな人材を育てることに成功していると実感している。また、生徒が将来を考えるにあたって、すでに「国境」というボーダーはなく、世界的視野で自らの人生を考え始めている。海外大学進学者が25%以上という数字からもそれが窺われるだろう。

義務教育段階からBC州の教育メソッドをはじめとする英語教育と国語（日本語）教育に力を入れており、さらには仲間との協働、PBL(Project Based Learning)を通じての積極的な意見構築やプレゼンテーション研修を通じて、豊かな人間性、創造性を養っている。中学・高校でのダブルディプロマ修得のプログラムは、そこで培われたものを、さらに進化させ、発展させる上で重要な役割を担っていると言えるだろう。

〔II〕 自己評価を踏まえた学校関係者（当該学校の教員を除く）による評価

このダブルディプロマコースの優位点は大きく分けて3点である。

1. 日本で初めてカナダの教育課程と文化学園大学杉並高等学校の教育課程を融合させたコースで開設以来8年となるが、着々と成果を上げてきている。しっかりとした杉並高等学校の教育基盤に基づき、日本人である知識のみでなく教養と智慧を修得した国際人を育てる目的を推進している。カナダの教育課程と日本の社会・歴史・文化を英語で比較・対比しながら学ぶことにより、両国と国際社会の理解をより深め、生徒の世界観を広げている。生徒は、このコースで身に着けた知識や智慧を発信することができるようになってきている。これは外部から来られた授業見学者の方々からのコメントにも基づいている。さらに令和4年度より中学1年にもダブルディプロマコースを新設し、カナダブリティッシュコロンビア州の教員免許を有する教員による授業を週17コマ（英語10、数学5、理科2）行えることになった。このことにより、より早い時期からカナダの教育に触れることが出来、中学1年生の英語力が飛躍的に伸長した。

2. PBL の推進： このプレゼンテーションを通して学ぶ学習法は、相対的に見て非常に理にかなった学習法である。発表者は、準備することからまず学び、そのプレゼンテーションを聴く生徒は、リスニング力や質問や意見を構築する力、すなわちクリティカルシンキング力を高めている。生徒達のためのプレゼンテーションでは無く、外部の教育者やビジネスで成功を収めた方々をプレゼンターとして呼び出し、生徒達が実際に外部との接触を英語で行う実践的学習となり成果を上げている。また中学1年より PBL 型の授業に取り組むことにより、これまでの中学1年の生徒に比べ、深い思考力、プレゼンテーション力を発揮することが出来るようになった。
3. 校外学習： 教室内で学習した知識やスキルを実際に役に立つか試してみる学習は、生徒達の学びを実体験させる効果的な学習となっている。国内での校外学習はもとより、高校1年で行われるカナダでの約1か月にわたる Social Studies の校外学習は、ホームステイでの異文化学習を加え、生徒達の自信にも繋がっている。

提案：課外活動の充実

このダブルディプロマコースは、まだ10年にも満たない新しい教育課程であるが、時間とエネルギーを投資し、より課外活動の充実に努めてほしい。できれば、コースの特徴を生かし、中学も高校も普段より英語でコミュニケーションを取り、生徒主導型の課外活動を増やす取り組みを行ってほしい。課外活動から得るものは多大で、今まで文化杉並高校でのいろいろの部活が存在し活躍してきたことから立証済みである。

外部評価（文化学園大学 元主任教授：坂本 政子）

[Ⅲ]. 課題の改善のための取組の方向性

中学におけるダブルディプロマプログラムにおいては、逆に日本のカリキュラムを苦手とする生徒もおり、そういった生徒の基礎学力の養成のために教科を超えた教員間の連携・補講などの手立てを講じる必要がある。また入試段階においても、事前に本校の教育内容を明確に示すこと、入試内容が入学後の学習プログラムに円滑に接続できるものとなるよう内容を更に精査していく。

BC州の授業は日本と比べより生活に密着しているため、校外での活動が多くなり、校外学習は最低でも半日かかるので、時間割変更が増え、日本の授業担当者にも迷惑をかけた。時間割の作成で困難なことが有ったりする。これについては、校務分掌の一つである「国際部」を、日本とカナダのハブとして更に機能させ、統制の取れた情報のやりとりの構築をもって解決の方向としたいと考えている。

また、進路に関して海外大学の出願の期間が長期にわたるため、卒業後の5月まで担任の業務が続き、新年度の業務と重なり負担になっている。これは、そうした状況を周知した上で、新年度の学年団の協力を仰ぎつつ仕事の負担軽減などを配慮することで対応するよう指示している。

以上